

Novyye
25. 12. 92.

素顔のゴルバチョフ

元警護官・一年後の独白

ゴルバチョフはいつも孤独だった。もろろん彼が家族の書記長と呼んだライサはいつもそばにいた。しかし、客は皆無といってよかった。夏のフォロス(ウクライナ・クリミア半島の大統領別荘でもそうだった。祝日も記念日も二人きりか内輪で過ごし、党の盟友といえど決してその仲間には加えなかった。ゴルバ

曰課の夕方の散策だけは、政治的晩年にも欠かさなかった。「散歩しよう」と言い出すのはいつもライサ夫人だった。

私は、後ろについて、彼を非常事態から守るのが任

25 Бер, 92
92.
夫と政治議論
И омыри
人事口出しも

「孤独」支えたライサ夫人

は聞き取れる距離だった。治に口をはさんでいたとい

ライサ夫人を通じてゴルバ

は聞き取れる距離だった。治に口をはさんでいたとい

ライサ夫人を通じてゴルバ

ついに耐えかねて、手で空

夫は夫の身なりを特に

靴下を履いていない」と夫

かせもこともあった。フォ

重労働だったが、ライサ夫

「私たちのおかげで」休



ライサ夫人は公私にわたりゴルバチョフ氏の相談役だった(90年11月、ローマで)

大統領を辞任する直前、

(文中敬称略)